

山崎郷土叢刊

NO. 128
 平成29.2.25
 山崎郷土研究会
 兵庫県宍粟市山崎町
 大谷 司 郎

明治以降の山崎の年表 (一)

大谷 司 郎

昭和三十三年三月に「宍粟郷土研究会」の名称で、本会は再発足しました。その後、昭和四十七年一月の総会において、会の名称が「山崎郷土研究会」となつて現在に続いています。

本会の大きな事業の一つである会報の発行をみると、創刊号が昭和三十三年六月一日に発行されて以来、現一八号まで、脈々と発行され続けていますことに、先人のご努力とご寄稿いただいた諸先生や会員の皆様に改めて感謝申し上げます。今後とも末永くこの会報が続きますようご理解ご協力をお願いいたします。

さて、今回から数回にわたり明治以降の山崎町域を中心とした出来事を年表にしてみましたと考え、貴重なページを使わせていただきませう。これは、昭和五十二年七月発行の本会報四十九号から五十五号まで七回にわたり明治以降の山崎の年表が掲載されており、それをベースに他の出来事などを挿入して作成したものです。雑多になり見にくいことをご容赦ください。

昭和五十二年(一九七七)に発行された『山崎町史』に、明治維

目 次

明治以降の山崎の年表(一)	大谷 司郎	1
「道筋御案内御本陣用達」と 奉行の力が問われたとき	鎌田 裕明	4
四公六民の民	浅田 耕三	6
句集の紹介 句集『溪流』宗平圭司さん発行	河本 雅視	7
続「ホテルの里」やまさき(後編)	河本 雅視	8
田路氏の城跡をめぐる	竹内 克司	12
郡境に足跡を残した武将	清水 哲	14
〇〇町はどこだ	研 修 部	19
NHK大河ドラマ「真田丸」の現地を訪れて	研 修 部	19
宍粟市の梵鐘(明治・大正・昭和・平成)	片山 昭悟	20
年代順集成(Ⅲ)	片山 昭悟	20
会員・家族の文芸	片山 昭悟	24
事務局だより 総会のお知らせ	片山 昭悟	25
編集後記	片山 昭悟	25

新期、この地の庶民に激動する時代のうねりがどう及んでいったのかを、山崎藩大庄屋・庄家に残る『公私用日記帳』の抜粋から、当時の混乱の様子が紹介されています。特に明治五年十一月二十五日の項を引用すると、「兼ねての大陰曆を御廃止に相成り、太陽曆を御用に相成り候ては、来る十二月二日にて当年歳末になり、同月三日元旦に仰出され候、誠に奇代未聞の大御変にて一同驚き入り候」とあり、このような大変革の明治初期から同十九年までを頃までを今回掲載いたします。

明治以降の山崎の年表(1)

西暦年	和暦	年	月	日	事項	出典
1868	明治	元	9		「明治」と改元	
1869	明治	2	2		藩主忠鄰隠居し、忠明が襲封する。	郷土会報No.49号
1869	明治	2	6		版籍奉還で藩知事本多忠明。大参事(家老)、小参事(奉行)を置き藩政を執行する。	郷土会報No.49号
1869	明治	2	9	13	藩主忠明山崎藩知事となる。	庄家公私有日記帳
1870	明治	3	2	18	昨年両作不熟、当年大飢饉、難渋者に粥焚き出しする。	庄家公私有日記帳
1870	明治	3	9		庶民の姓を許し、武士の官名を廃止する。	郷土会報No.49号
1871	明治	4	6	20	高下組17か村、中比地組10か村、今宿組13か村都合40か村に組替えとなる。	庄家公私有日記帳
1871	明治	4	7		廃藩置県で本多忠明が山崎県知事となる。	山崎町史
1871	明治	4	7	14	藩政廃止により山崎県、安志県、林田県、竜野県、三日月県、姫路県になる。	山崎町史
1871	明治	4	9	13	忠明知事免ぜられ、東京へ引っ越しとなる。大庄屋など見送りする。	庄家公私有日記帳
1871	明治	4	10	20	河東に農民強訴あり、一揆の徴候あるをもって藩兵鎮圧に赴く。理解の上引取る。	郷土会報No.49号
1871	明治	4	10	22	高所・中村より強訴、21人逮捕。内6人首謀者入牢。他は解放。	庄家公私有日記帳
1871	明治	4	11	2	山崎県を廃し姫路県の管下に入り、間もなく飾磨県と改称する。	郷土会報No.49号
1871	明治	4	11	9	飾磨県と改称 大区小区制 ○番地でなく○番屋敷 飾磨県権令に森岡昌純が就任する。	山崎町史
1871	明治	4	11	18	旧藩主の妻女、東京へ引っ越し、稲垣神社で見送りする。	庄家公私有日記帳
1871	明治	4	11		飾磨県の宍粟郡、佐用郡の事務を行うため山崎本多氏の旧政庁に第3出張所を置く。大国英定が所長となる。	宍粟(宍粟地方事務所編)
1872	明治	5	3	13	山崎郵便局が設立される。	山崎町史
1872	明治	5	3	18	出張所を廃止して、播磨全域を16大区に分けて政務をおこなう。宍粟郡は第16大区にあたり、郡内を9小区に分ける。小区毎に戸長・副戸長及び試補を置き、また各大字には区長をおく。	宍粟(宍粟地方事務所編)
1872	明治	5	12	2	これまでの大陰暦は12月2日まで翌3日が6年元旦になる。(太陽暦採用)	山崎町史
1873	明治	6			前年の学制の発布により、山崎町内で小学校20校余り設置するが、学校とは名ばかりで寺社や民家を借用するものだった。	山崎町史
1873	明治	6			岩田神社(上比地)、中山神社(中)、位尾神社(小茅野)、五社神社(大沢)が村社になる。	山崎町史
1873	明治	6	1	25	高下村法伝寺で小学校開校、25人の生徒が出席したが、定着せず休業が続いた。	庄家公私有日記
1873	明治	6	2	1	改暦が俄のこと故、本年に限り1月31日を大晦日として、諸帳面悉く1月晦日までは去年の帳面を使用のこと。諸取引混乱する。	庄家公私有日記帳
1873	明治	6	3	26	散切り頭の布告あり、今日親子とも髪を切る。真に前代未聞の変革だらけ。	庄家公私有日記帳
1874	明治	7			山崎八幡神社、雨祈(貴船)神社、大倭物代主(諸守)神社、野口神社の4社が郷社となる。	山崎町史

明治以降の山崎の年表(2)

西暦年	和歴	年	月	日	事項	出典
1874	明治	7			岩田神社(宇原・川戸)、石作神社(須賀沢)、矢原神社(矢原)、桓武伊和神社(中野)、山神社(母栖)、松尾神社(土万、塩山)、若西神社(青木)、産霊神社(塩田)、武太神社(三津)が村社になる。	山崎町史
1874	明治	7	11		戸長集会所を区務所と改称する。	郷土会報No.49号
1875	明治	8	7		9小区を併合して4小区とし、区毎に区長及び副区長を置く。 各村に戸長を置く。戸長の事務所を戸長役場という。	郷土会報No.49号
1875	明治	8	9		下ノ村(蔦沢)を東下野村に改称する。	山崎町史
1875	明治	8	10		郭内を鹿沢町に改称する。	本多家文書
1876	明治	9	1	10	小規模の小学校5校と思斉小学校が合併し、本多氏の旧藩邸を利用して篠陽小学校を開設する。山本直方が校長に就く。	郷土会報No.49号
1876	明治	9	8	21	飾磨県は兵庫県に合併となる。	山崎町史
1876	明治	9			断髮廃刀令公布される。	山崎郷土会報No.49
1876	明治	9			生活困窮の失業士族を救済するため、金禄公債が発行される。	山崎郷土会報No.49
1877	明治	10			西南の役勃発 旧士族抜刀巡査応募に多く志願する。	山崎郷土会報No.49
1878	明治	11			失業士族の金禄公債をもとに士族授産所大成社が結成される。織物を主として女子は養蚕、製糸、機織に従事し、男子は繭の仲買、桑畑の開墾に従事する。旧城内の武器倉庫を開放して織物工場とする。	山崎郷土会報No.49
1878	明治	11	7		大区・小区制を廃して自然村を生かした「郡区町村編制法」が布告される。	山崎町史
1879	明治	12	1		宍粟郡役所を開設する。	山崎郷土会報No.49
1879	明治	12	1		郡区改正が行われ、従来の大小区を廃止し、郡長を置いて統括する。安原照之が初代郡長となる。	山崎郷土会報No.49
1879	明治	12			戸長役場と郡役所を山崎町本町の元町役人会所に設ける。	山崎郷土会報No.49
1879	明治	12			元竜野警察所轄山崎巡查交番所が山崎警察分署となり、初任分署長に元大村藩士山田丈太郎が任命される。	山崎郷土会報No.49
1879	明治	12			竜野区裁判所山崎出張所が山崎町門前にできる。	山崎郷土会報No.49
1880	明治	13			山崎町山田にあった伊藤塾と須賀沢の学校が合併して徳潤学校となっていたが、篠陽小学校と合併する。	山崎郷土会報No.49
1880	明治	13			上の山稲荷堂の前に石の五重の塔ができる。	山崎郷土会報No.49
1881	明治	14	8	10	山崎警察分署長山田丈太郎氏賊徒の為殉職する。	山崎郷土会報No.49
1881	明治	14			山崎町寺町の元泉龍寺跡地に劇場旭座ができる。	山崎郷土会報No.49
1881	明治	14			与位神社(与位)が村社になる。	山崎町史
1882	明治	15			旧藩士遠藤巨氏が大手門の石垣や裏門の土堤を壊し、城下へ通じる新道路建設を始める。完成後遠藤坂と称する。	山崎郷土会報No.49
1882	明治	15			陣屋内の米蔵を春安へ移し、小学校運動場を広げる。	山崎郷土会報No.49
1882	明治	15	8	5	風水害で揖保川氾濫し、城下村で堤防決壊、水田3町歩半流失する。	宍粟(宍粟地方事務所編)
1884	明治	17			華族令により旧藩主本多貞吉氏、子爵となる。	山崎郷土会報No.49
1884	明治	17			警察分署の庁舎山崎町山田町に新築成る。	山崎郷土会報No.49
1884	明治	17			上の山稲荷堂に町内有志により、備中高松の最上位経王菩薩を分置し、石垣を畳み境内に小公園を造り、最上山と称した。	山崎郷土会報No.49
1885	明治	18			各村代表により「農談会」を結成し、農業改良に努めた。	山崎町史
1886	明治	19			竜野警察分署より独立して、山崎警察署となる。	山崎郷土会報No.49
1886	明治	19	2		野口式貫が郡長となる。	山崎郷土会報No.49

18.11月 山田丈太郎墓石碑建立される。
19.初秋 梁山新石碑建立される

山崎町と直隣金石文

「道筋御案内御本陣用達」と 奉行の力が問われたとき

鎌田 裕明

今、伊能忠敬が人々の関心を集めています。例えば西播磨の文化や歴史の専門誌である『バンカル』は昨年末の最新号で「伊能忠敬と播磨の道」を特集し、姫路を中心に相生、赤穂など測量隊の歩いた道筋の様子を紹介しています。残念なことに菅野、山崎については「支隊」が測量したので紹介されていません。また、銀山街道の測量や、氷上郡での在方の負担についての研究報告があります。

小論では、測量隊の「支隊」が山崎の本陣橋屋佐兵衛方に泊まった時の供応の様子を、村役人代表の高下村庄屋哲三郎が「天文方御通行に付き道筋御案内御本陣用達」の役を遂行した際の記録『天文方御巡廻覚日記』（以下『覚日記』とする）に依って読み取り、私が見て感じたことを記します。

文化十年十二月二十五日は今日の暦では二月十四日、立春が過ぎたといえ粉雪混じりの北風は身体中凍えさせるような日でした。忠敬測量隊の支隊は下三河を出て、三里十五間の測量を終え、七つ時（午後四時頃）の宿入り、隊員は小憩後、乃井野、土万、葛根、高下、門前など通過地間の距離、家数、反別などの整理や八幡神社や篠の丸古城址など景観の特色について記録をまとめます。問題は小憩から夕食にかけて起こりました。前記の哲三郎の『覚日記』を見ましょう。



写真は表紙 文化十年『天文方御巡廻覚日記』高下村
西十一月 哲三郎（平成二十九年の酉年と符号する）

下部が供応や食について・・・「気に入らない」「かれこれ難しく」言う、というのが事の発端でした。下部とは本稿のキーワードで、理解するには幕府天文方役人の階層構造を知ることが必要です。即ち、暦学・天文関連のトップである局長高橋景保は、はじめ寺社奉行の、後には若年寄の支配下にあり、その下の実務執行者である手付が伊能忠敬でした。忠敬の下には天文方下役と呼ばれる幕府の役人がおり、さらに忠敬や下役の弟子で内弟子と呼ばれる技術部門の専門家がいました。その下に棹取りと呼ばれる専門家を補助する者や下役などの従者、下部がいました。この下部や内弟子には時に専門家をしのぐ知見や技術を持つ者がおり、測量事業はこのチームワークの上に遂行されたのです。

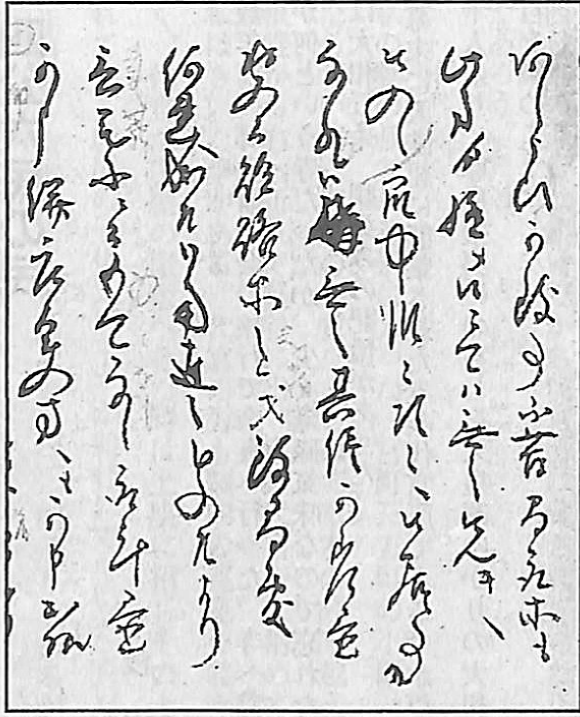
二十五日、「測量隊午後四時頃橋屋へ入る、ここで下部から供応と接遇について不満が出る。」と哲三郎が記しています。

「下部へ御菓子を三宝に盛らず差し出したのが、気に入らないよ、うで、・・・御酒を引き取り下げたのも気に入らない等、かれこれ難しいことを云う。そこで奉行の中瀬様にお伺いすると『下僕には下僕の扱いがある。不都合はない、酒の引き取り下げも測量隊の決まりである。そのまま差し置くがよい。決して賄賂などをしてはな

らない。御用達の者が言葉でもてなし取りはからうことだ』。また奉行の名嶋庄大夫様は中瀬静右衛門様とともに『まだ、下部のものがいろいろ言うようであれば自分たちが隊の幹部に掛け合う』と明解であった。」

その夜、「測量隊士が調べごと等を済まし夜食の時、幹部の永井甚左衛門や門谷清治郎は『接遇は丁寧だ』とご機嫌であった。別室の下部の者たちに彼らの『気に入らない』発言について尋ねると、『酒はこれまでも飲んでいない、心置きなく引き取り下げられたい』とのことであった（不満を述べていない）。この後、神戸や安志（二十六日の測量地）の村役人からの問い合わせ対応で九つ（深夜十二時）を過ぎ、同役の御用達である善大夫と代わる代わる眠った。」

以上、日記の記述から、私は次の点について地元関係者の的確な



4行目から「・・なれハ 構無之其儘
可差置 決而賄等之義致問敷何
連成共御用達のもの共より言葉ニ而
もてなし取斗置可申・・」『覚日記』
文化十年十二月二十五日の条から

対応に驚いたことでした。第一は、受け入れの村方代表哲三郎が状況把握を的確にして、下部の「かれこれ言う」のに対応したこと。おそらく下部の者が給仕の者にいくらかのネガティブなことを言っただけかもしれませんが。それを聞いた哲三郎が奉行に伺った上、受け入れ事業の地元・実務責任者として下部の公式な見解を引き出していること。第二に奉行、中瀬と名嶋の毅然とした対応（賄賂を否定し、強いて下部がかれこれ言うなら測量隊幹部と掛け合おう）が光っています。第三に、測量隊の綱紀徹底の様子。食事は簡素にし、飲酒はしない、買い物したら代金を払う等の規律は、「二十四時間が測量という公務だ」という忠敬のスタンスであったということです。

それにしても、折衝の責任者、哲三郎の核心を突いた対応がなければ、「山崎藩本陣での、下部への礼を失した対応は、測量事業の円滑な実施を妨げるものであり、即ち幕府への不遜である」と、大事に至っていたのではと思われまます。また、中瀬と名嶋の奉行としての自覚と責任をふまえた助言（誠意ある「もてなし」で対応し賄賂を強く否定した）には、朱子学の誠心、正心、正義など治者のメタリテイに満ちた豊かな識見を感じるのであります。また「おもてなし」は無財の七施（眼、和顔悦色、言辞、身、心、正座、房舎）をはじめ日本人のホスピタリティの基本として今日生き続けていることにも、「天文方御通行」に発揮された山崎の先人の偉さを再認識した次第です。

本稿の史料は庄家文書の「第八次測量隊関係文書」から、山崎古文書同好会（世話人・横井時成氏）が作成した『伊能忠敬一行の山崎来藩』によりました。記して謝意を表します。

四公六民の民

浅田耕三

数年前、郷土研究会の旅行で奈良へ行った。寺へ参ったように思うが何という寺だったか、少々耄碌気味なので忘れたが、とおった所は大和五条、馴染みの記憶があった。

幕末に天誅組に襲撃された五条代官所である。水戸脱藩浪士ら百五十人余り、尊皇攘夷ののろしを天皇家ゆかりの大和であげ天下の耳目を集めようとした。

代官所の役人は十人程度、たちまち制圧された。五、六人が斬られ、代官の鈴木源内は首を代官所の門前に晒された。

さらにこの時呼ばれて代官の肩を揉んでいた按摩まで殺害された。

幕府領は天領と呼ばれそれぞれの天領毎に代官所が置かれていた。代官は小身の旗本から選ばれたが、厳正な算勘と筆蹟の試験があった。

字が上手で算盤が達者でなければ代官になれなかったのだが、選考にはもう一つ基準があつて、それは中立公平でまわりから信頼される人物ということであつた。

テレビの時代劇に出てくる代官はたいがい悪代官で悪徳商人や不逞浪人、無頼の徒と組んで私腹を肥やすが、実際にはそんな代官は殆んどいなかった。この鈴木源内も評判のよい温和な人物だったらしい。

天誅組は数を含み力におごつて非道な暴挙にはしつたがその報い

はすぐに来た。五条代官所を襲つた翌日、すなわち文久三年八月十八日は世に名高い八、一八の政変の日であつた。

薩摩と会津により攘夷倒幕の長州が禁裡から追放されたのである。

天誅組は孤立無援となり、必死に十津川郷士千人を使喚し高取藩と戦い、彦根、津、紀州藩とたたかたがいがいずれも惨たんたる敗北に終わり郷士にも背かれて九月二十五日に潰滅した。

当地とゆかりのある生野の変は、最初この天誅組に呼応して決起する計画だった。しかし事前に天誅組敗走の一報が入つたにもかかわらず、河上弥一ら過激派にひきずられて生野代官所を襲つた。その後も強行派と中止派の論争がやまず、浪士間のこの不協和音がたつて生野義拳はたつた三日で潰え、多くの浪士が命を失い美玉三平と中島太郎兵衛は当木の谷で最期を遂げる。

話は変わるが江戸時代二百六十年間、天領は恵まれていた。

現在の一宮町波賀町千種町、山崎町土万地区、佐用町三河地区の各地は生野代官所の支配で四公六民の年貢率がほぼ守られていたから大名旗本領より総じて豊かであつた。

大名領は戦時体制のままの膨大な家臣団をかかえ、軍旅の形の参勤交代一つを見ても、武器、食料、日用品一切を携行した旅でその荷役の人足に支払う賃金だけでも高額のついでだった。

したがって大名領の領民にかかる年貢はひどい場合は八公二民の苛酷さであつた。

四十人程の浪士におそわれた時、生野代官所の役人たちは実に柔順で誰一人命を失うものではなく代官所を開け渡して浪人たちの本営

とさせ、あまつさえ領民の納めた年貢の銀も浪士の要求するままに差出した。

代官の川上猪太郎は倉敷代官所へ長期の出張中で生野は留守にしていた。二年も前から但馬一帯に脱藩浪人が蠢動し不穩の気配があった中を代官は倉敷へ難をのがれていたのだろうか。上が上なら下も下で幕臣も太平狎れし、柔弱になっていたと勘ぐりたくもなるが幕府の選考基準が少々平和主義に偏りすぎていたきらいがある。

しかし浪士たちがそれぞれ代官所や生野の商家から押し借りした金子はいかんせん小判よりずっと重い銀であったから重さに堪えず落ちていく途中で土中に埋めたという風説が事件後に立った。

黄金小判の一両は銀の六十匁と等価値だから銀貨十両（四十三匁丁銀一丁）に銀玉（五匁）を三粒ぐらいと交換するのが通貨の相場だった。

西日本の通貨は銀貨だから代官所に蔵されていた年貢も銀だったのであろう。

私の妻の叔父が養子に入った一宮町三方町の小阪は先祖が庄屋だったらしいが、在所の年貢をまとめて草木の峠を越え千町の手前の赤根堂から右へ折れて長谷に出、生野代官所に納めていたという話を私はきいた事がある。代官の方も領内の巡見を時々やっていたらしく、代官が庄屋の屋敷へきた時は上座に招じその上段の間が設けられていて庄屋の子供（男子）が給仕にでていたという。

生野と一宮町三方谷を結ぶ道は三、四通りもあるが、代官がどの道を通っていたかは残念ながら不明である。

句集の紹介

句集『溪流』 宗平圭司さん発行

宗平さんは、「山崎郷土研究会」の葛沢地区支部長と研修部員であり、会報の会員・家族の文芸欄担当者です。宍粟市内はじめ姫路などでも俳句指導者として活躍です。

このほど新聞や雑誌の文芸欄で、入選した作品五百三十句をとりまとめた『溪流』を発行されました。A5版二六五ページで、書名の『溪流』は「溪流の音万緑の底に聞く」に由来します。葛沢地区の自然を詠んだ句集には、伊沢川に沿った清流や豊かな森、そしてそこに住む人たちのふれあいを詠んだ句などが収載されています。

宍粟市内などで俳句指導の宗平さん

文芸欄入選作を一冊に

初句集『溪流』発行 100人に贈呈

宍粟市内などの4教室も度々選ばれた。入室で俳句を教える同市山崎町中野の宗平圭司さん（78）がこのほど、新聞や雑誌の文芸欄で入選した作品500句を掲載した初の句集『溪流』を発行した。自然の変化に感動を見いだし、素直に表現した句などが並ぶ。

宗平さんは、県職員を退職する間際の59歳で俳句を始めた。作品を客観的に評価してもらったため投稿を始め、最優秀に当たる一席に



入選した俳句だけで初の句集を発行した宗平圭司さん＝宍粟市山崎町中野

タイトルは『溪流』。2007年8月に神戸新聞で入選した「溪流の音万緑の底に聞く」が採用。自宅がある葛沢地域の自然を詠んだ句で、教室で教えるように、俳句人生が転機を迎えた時期の作品だという。これまで投稿を重ねてきたが、宗平さんは「入選は選者の趣向にもよる。俳句ほど個性が表れるものはなく、結局は自分で満足できれば十分」と気持を楽にして、300部発行、非売品。先着100人まで無料で贈呈する。希望者は82円切手5枚を同封し、〒671-1277の1人郵便、宗平圭司さん（07900・665・0024）

（土屋川博也）

続「ホタルの里」やまざき（後編）

河本雅視

先の前編においては、一、ホタルの今昔・二、山崎のホタル・三、世界のホタルについて記し、中編においては、四、ホタルの一生について記しました。

今回の後編ではホタルの生育するための条件とか、自然環境への配慮等について述べたいと思います。

（次の写真は、ゲンジボタルの一方の触角は見えませんが、もう一方の触角はコケの中へ入れて命の水を探し求めています）

五、ゲンジボタルの生育条件

ゲンジボタルは清流に住むと言われていますが、はたしてそうだろうか、川の上流から下流の方へホタルの発生状況と水温、水質などを調べたところ、全くその通りと鵜呑みには出来ないことに気付きました。やはりホタルが生育していくための様々な条件が必要であることがわかりました。

①ホタルのエサ（カワニナ）について

昭和四十年代のある日、川の上流である谷川から出発して、川下へ、中流・下流へと、ホタルの発生状況を調査して気付いたことが



水を探し求めるゲンジボタル

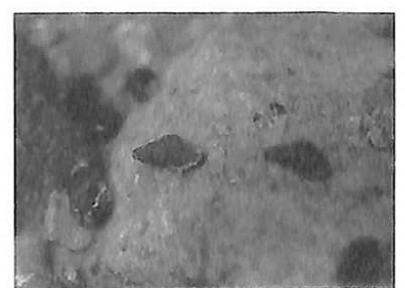
あります。民家の無い谷川ではほとんどゲンジボタルは見られませんでした。民家のあるところまで来ると、そこから下流へはあちこちでホタルの群舞が見られました。

日を変え、今度は昼間に水温などを調査しながら下流へと進むと、谷川は木陰があつて日射が少なく、水温も低く、透明な綺麗な水です。しかしカワニナのエサになる、石に生えたケイソウ（藻）などもなく、そのためホタルのエサのカワニナがいなのです。

そこから二百メートルほど下流の民家がある集落ではホタルが飛んでいた所なので、川の様子を見ますと、そこは民家の食器類や箆（ざる）や桶の洗い場になっていて、食べ残しのご飯粒や糠の漬物の切れ端等に、沢山のカワニナが群がっていました。ゲンジボタルのエサになるカワニナです。人間の食べ残しをカワニナが食べ、そのカワニナをゲンジボタルの幼虫がエサとして食べている。ここで生物が生きていくために大切なことはエサつまり、食べ物があるということです、その大切さに気付きました。また、或る時ホタルが大変多い場所があることを聞いて行って見ますとその上流に養鶏場があり、そこから鶏のエサが川へ流れ込み、カワニナがそれを食べて沢山のカワニナが育ち、ホタルの多い発生地となったようです。このことから食物連鎖のことが理解出来ます。

②水温について

ゲンジボタルの飼育を始めた頃の事です。七月初め、卵から孵化した稚幼虫を、花器に使用する直径四〇センチほどの水盤に、深さ



石に生えた藻を食べるカワニナ

三センチほど水を入れ、そこへ稚幼虫を百匹近く入れて、川から取ってきたカワニナを豆粒程の肉片にして五〜六個与え飼育を始めました。稚幼虫はあちこちに散った肉片に群がり食べていきます。

ところが七月・八月と気温が上昇すると幼虫は次々と死んでいきました。幼虫は水温が二十五〜六度以上になると死ぬのです。そのため井戸から冷たい水をくみ上げて水温を下げることもしました。

(現在はエアコンなどがあり、今昔の感があります)

ちなみに、ゲンジボタルの生育適温は約十度から二十数度ほどです。十度以下になると活動が鈍くなり成長も鈍ります。五度になりますと殆ど動きません。また、みぞれ氷詰めになっても氷解すると生き戻ります。

低温には案外丈夫な幼虫ですが、高温には全く駄目です。

③水中溶存酸素量について

ホタルの飼育でもう一つの問題は、エサになるカワニナの肉片に群がっていた稚幼虫が翌朝には集団で全滅している事でした。原因は何か、色々考え話しあいました。エサは毎日取り換えました、エサの無いところでも集団を作って死滅しているのもあり、結局、幼虫は光を避けて群れを作ります。そのため水中の酸素不足が原因であることに気が付き、底に川砂を入れて群れを作らないようにしたり、また、底面濾過法や冷水の循環など飼育方法を改良し、少しずつですが成功に近づいていきました。

また、この間に溶存酸素量の測定方法も学び、気温と溶存酸素量との関係、ホタルやカワニナそして金魚などの酸素消費量を測定したりもしました。中学生ともなるとたいしたものです。その測定に

よって水温上昇での死滅も污水問題もすべてこの水中の溶存酸素量に関係があることも分かりました。その点自然界の川は落差があり、浅瀬があつて酸素が過飽和に溶け込んでいます。

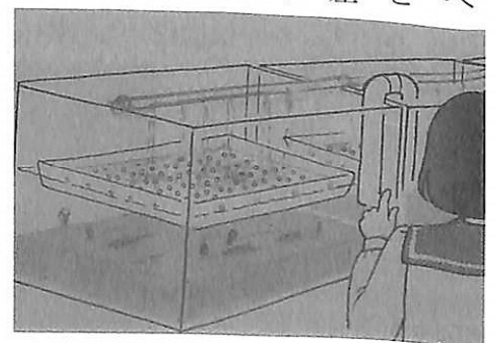
④浄化菌のこと

飼育中の事ですが、幼虫の飼育中、不思議なことがあります。一方の水盤の幼虫は元気に育っているのに、他の一つの水盤

の幼虫はまたしても死にます。そこで度々その水盤の水を新しく入れ替えましたが駄目です。丁度そのような時、テレビで富山県の水銀汚染のことで、水銀を食べるバクテリアがいて汚染水を浄化することを、金魚を入れた水槽で説明していました。そのとき、ホタル飼育水盤の死因の事が頭の中で結びつき、幼虫が死ぬのは浄化菌の有無ではないかと思ひ、翌日、早速水盤の水をよく見ると、良好な水盤の水は底にほんの少し沈殿物があるが水は透明であり、問題の水盤の方は透明度が落ちていくことに気が付き、取り換えた水に他の水盤の水を加えました。それからは問題が起きなくなり、浄化菌の浄化作用のことを考えて飼育を続けました。

昔から「金魚の水を取り替えるときは半分ほど取り替えよ」とか、「庭に池を造った時は泥を入れよ」等と聞いていながら役に立たない事でした。

川においてもこの浄化菌の浄化作用によって汚染された川も浄化されますがやはり限度があるようです。特に農薬とか石油製品など



屋内飼育中の絵図 冷水循環型に改良

は論外です。

⑤環境について

生物が生きていくためには、その生物に適した環境が必要です。一般にゲンジボタルは清流に住むと言いますが、清流であってもエサになるカワニナが住み着いていないと駄目です。

先に、幼虫は水中に住み、その水の溶存酸素が大切である事を述べましたが、エサになるカワニナも同様に溶存酸素が必要であり、夏場の活動期には両方とも水中に酸素の溶け込みやすい波立った浅瀬にいます。幼虫にとってもカワニナにとっても好都合な環境と言えます。

また、幼虫の飼育で、水温上昇によって死滅したことを述べ、また、水温と溶存酸素量との関係は大きく、水温上昇とともに溶存酸素量が減少することも実験によって確かめたことも述べました。

自然界ではどうでしょう。時々、菅野川の下流の加生地域にゲンジボタルが多いが何故かと尋ねられるのですが、確かに凄く多いのです。そこは竹藪が連なっており、真夏でも冷たく綺麗な地下水が沢山湧き出しているようです。早魃の時上流では干上がる事があっても加生辺りは流れが見られたことからわかります。また、竹藪がある所には湧き水があるとも言われています。このようなところは加生に限らず菅野川、伊沢川、三谷川などの各所に見られ、また、揖保川からの灌漑用水路などにも同じような条件のところが多く、沢山のホタルが見られます。



湧き水のある加生の川岸風景

この様にボタルにとっては水温、エサになるカワニナ、水中溶存酸素量など整った環境が大切なことが分かりました。

六、自然環境への配慮

近年ホタルの発生地で気になることがあります。水質汚染で問題のあった家庭排水や、農薬問題については下水道完備や、また、農薬の毒性基準を強め、厳しい制限によって強力な農薬は抑制されています。しかし人間優先が進められ、まず、護岸工事を見るとコンクリートで固めた石垣で造られ、生物の住処環境などは全く考えられていません。

しかしこのことに配慮した工法を実際に使っている場所があります。それは今も沢山のホタルが飛び交っている高下地区の河川です。

護岸工事の時、下の写真に見るように、穴のあいたブロックの後ろ側にかぼちゃ大の大きさの石を沢山詰めた護岸工事がなされており、生物の住処や退避所にもなっています。ホタルにとっても、成熟幼虫は三月末頃、水中から丘に登って土の中で土繭を作り、さなぎで二〇日間ほど過ごして成虫になって飛び立つわけですが、この工法では無理なく丘に登り、土中で蛹になり、成虫になって飛び立つ事が出来ます。

もう一つの問題は明るさです。ホタルは月夜でも飛び立つ数は少なくなります。防犯灯による明るさも、灯の近くの明るい処は少なく、水銀灯は非常に明るいため沢山飛んでいた春安橋の辺りは殆ど



水生生物に優しい護岸工事

飛ばなくなりました。

なぜホタルは光に対してデリケートなのでしょう。それは発光する理由にあります。ホタルは光る事によってカップルの相手を探します。日が暮れるとオスは飛び立ち集団を作り一斉明滅を行います。メスは一斉明滅に加わらず草むらで明滅をするのでオスからは見つけやすいわけです。ところが周りが明るいと光が届かずカップルになることがむずかしいと言えます。丁度騒音の中で相手に呼びかけようとしても届きにくいと同様と言えます。水銀灯などは大音響にあたるのでしよう。

また、一番問題なのはナトリウム灯です。縦貫道に並木のように点灯されているこの橙色の光は昆虫を寄せ付けなく、またこの光の届く範囲にいたホタルは飛べなく、一匹もない状態です。成虫は草の露だけで二週間ほどの命です。この貴重なホタルを守るためにも川面に光が届かぬようにカバーを工夫して、ホタルなどの生物に影響の無いようにする必要があります。

七、大自然は素晴らしい

蛍を飼育しながら様々な困難に出会い、

その度に自然界を見ると今まであまり気に留めていなかった事が、なんと自然界はうまく出来ているなど気付くことが度々ありました。

例えば、屋外に飼育場を作って屋外の研究もしていたのですが、水を取り入れるのに、横を流れる小溝から取り入れていました。一



光害のある中国道ナトリウム灯

年目は問題がありませんでしたが、二年、三年と続くうち、飼育内の砂や小石が泥を被り飼育困難となりました。掃除をするにも幼虫が中において出来ないしどうしたものかと悩んでいて、ふと、川のことを考えると洪水の後の川のなんと綺麗になっていることか、多少は犠牲になったと思われませんが、生物の避難する所もあり、また、ホタルの幼虫も尾脚に吸盤があつて石の下に吸い付き流されないようにしており、生物は思ったほど流されていないようです。

その他大自然を考えてみますと、驚くことばかりです。飛躍するようですが、食物連鎖とか生態系のバランスがとれています。しかし近年人間は自然界に無い物を、例えばビニールを作り使い捨て、それらが海で微粒子となって漂い、魚がそれを口にしており危惧されていますが、自然界はすべて再生される生態系があるなど、ホタルの研究を通じて大自然の偉大さに畏敬の念を抱きました。

おわりに

ホタルは昔から親しまれて来ました。その思いを歌や句に読まれています。歌人であった故藤村省三先生に嘗て選句して頂いたその一部を掲載しておきます。

蛍とる子順々に小さきかな

虚子

流れ来しがツトたち直り蛍かな

泊雲

狩り衣の袖のうら這う蛍かな

蕪村

以上

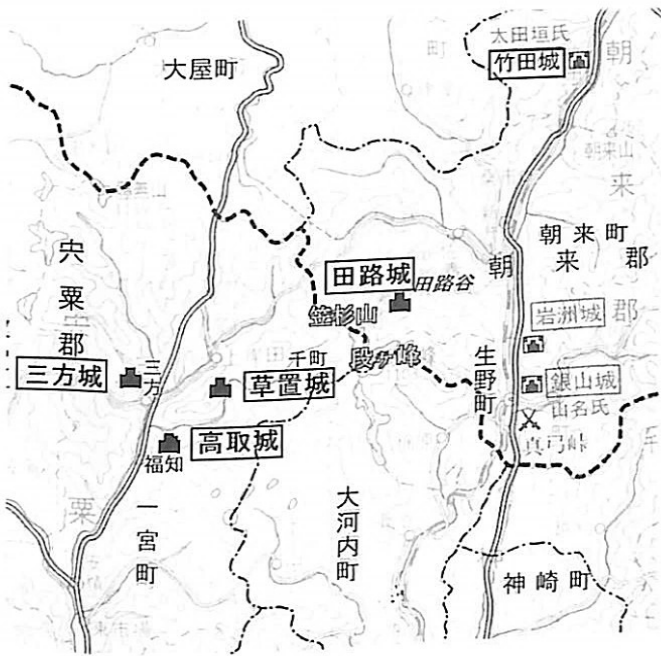
田路氏の城跡をめぐる

「郡境に足跡を残した武将」

竹内 克司

田路氏（たじり）という地元以外では難読の苗字は但馬国朝来郡田路谷（朝来市）が発祥の地とされる。田路谷は円山川支流の田路川流域にあり、古くは田道荘（莊園）があつた地で「たじり」と呼ばれていた。

田路氏は関東の千葉氏出自の御家人で、朝来郡田路谷から宍粟郡三方谷へ進出した国人と言われている。但馬朝来郡と播磨宍粟郡の境目の領主で、宍粟郡北部の三方東庄（一宮町）に本城をおき、福知の高取山城と草木の草置城を支城として、但馬朝来郡田路谷につづく千町（一宮町）越えのルートを押さえていたと考えられている。



田路氏の城跡 位置図

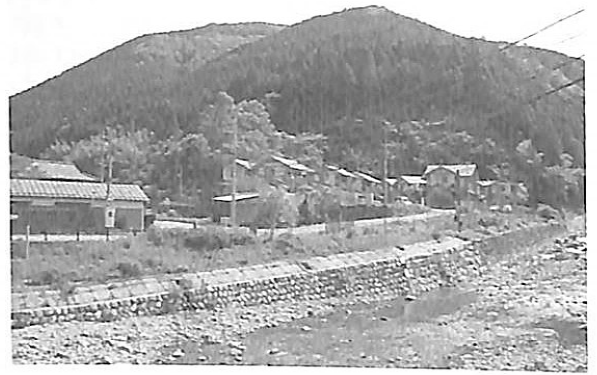


田路氏の城跡
三方山城跡（一宮町三方町）

田路家文書には仕えた主君・武将からの感状（軍忠状）が残されている。列記すると赤松惣領家赤松政則（置塩城主）、赤松政秀（龍野城主）、尼子晴久（出雲・月山富田城主）、山名家臣太田垣朝延（竹田城主）、羽柴秀吉の名のある武将からの軍功の文書である。田路氏は赤松惣領家に属していたが、戦国時代には対立する主君でさえ状況に応じて柔軟な対応のできる一族集団であつたと思われる。田路氏は天正八年（一五八〇）羽柴秀吉軍の宇野攻めに秀吉方に組みし、赤松則房の指揮下のもと長水城攻めに加わっている。一方、朝来の田路城にいた田路一族は天正年間に秀吉軍にことごとく一掃されたようである。

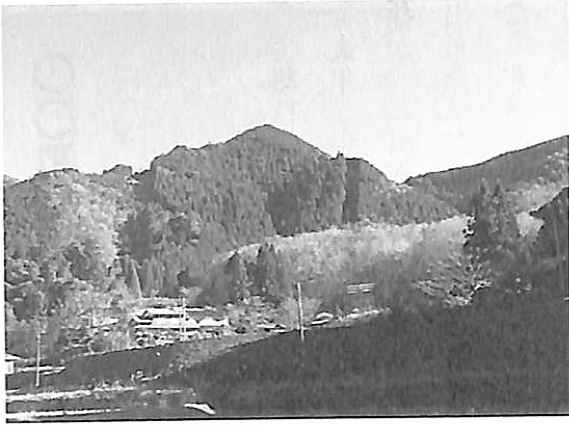
御形神社の西方に見える山の南尾根先端部（標高二八二・五メートル）にある。主郭（約二六×九メートル）と出郭、主郭背後に大堀切をもつ小規模な山城跡である。田路氏が三方東庄の在地領主として本拠とした城で、東の山裾に屋敷跡があつたと考えられる。

高取山城（一宮町福知）



福知溪谷の入り口の字高取の北にそびえる高取山（標高六〇八メートル）の頂上部にある。頂上部は狭く、わずかな土塁と削平地が認められるが遺構は明確ではない。南と東の尾根上に堀切がある。登り口の南山裾には構居跡？とおぼしき石垣群がある。

草置城跡（一宮町草木）



城跡近くまで百千家満から山道（車道）が敷かれ、高峰の北尾根上の峠部分に模擬槽もぎやぐらが建てられている。槽の背後の山の頂上（標高六〇一・六メートル）が城跡が残る。主郭（約八×六メートル）とそれを取り巻く曲輪跡、東尾根筋に堀切跡がある。登り口の高台に宝篋印塔ほうきやくいんとうが残る。

田路城跡（朝来市田路）



田路城跡は、田路川上流の田路谷を見下ろす小高い山腹にあり、城の背後の先に千町越えの峠の稜線が見える。山裾周辺には田路氏の菩提寺である祥雲寺しょううんじ跡、守護神の毘沙門びしゃもん堂どうがある。現在の祥雲寺は城主の邸跡に再建されたという。十数キロの深い田路谷には多数の宝篋印塔・五輪塔が残されており、この谷で激しい戦闘があつたことを物語っている。

戦国武将の足跡が城跡と苗字で今に繋がる

かつては朝来郡奥田路と宍粟郡千町とは婚姻の繋がりがある隣村で山越えでの村人の行き来があつたという。田路姓の分布については、宍粟市と朝来市以外では、夢前町新庄に数多く見られ、神崎郡市川町美佐にもあることがわかった。苗字発祥の地田路谷に今は田路という姓はなく、トウジとも読める藤次ふじつぐという姓が多くあり、そこに秘められた関係があつたのかも知れない。

確かなことは、但馬と播磨に生きた戦国武将田路氏の足跡が郡境周辺の城跡に残され、一族の苗字が面々と引き継がれ今に繋がっていることである。

参考…『兵庫県史資料編中世三』、『朝来町史』、『播磨国宍粟郡広瀬宇野氏の史料と研究』、『角川地名大辞典』

〇〇町はどいっだ

清水 哲

◇◇あれから一年

去年（平成二十七年のこと）の九月ごろから山崎幼稚園年長組の孫が、「出水町や北魚町などはどこにあるんや？」とさかんに言い出した。友だちができ、また園の行事などで各自自治会名が使われることが多くなり、関心を持ったのであろう。姉の通う山崎小学校のこの年の運動会でも、観覧席テント図やブロック別リレーの地区割り表にも次の様に、街中密集地の自治会・児童会名が登場する。

- 1ブロック 加生・門前
- 2ブロック 西町・元山崎・本町・山田町・北魚町・寺町・紺屋町・伊沢町・大歳町・福原町
- 3ブロック 出水町・富士野町・旭町・鴻ノ町・横須・東横須
- 4ブロック 庄能・上寺
- 5ブロック 今宿・中広瀬・山田
- 6ブロック 東鹿沢・中鹿沢・本鹿沢・西鹿沢

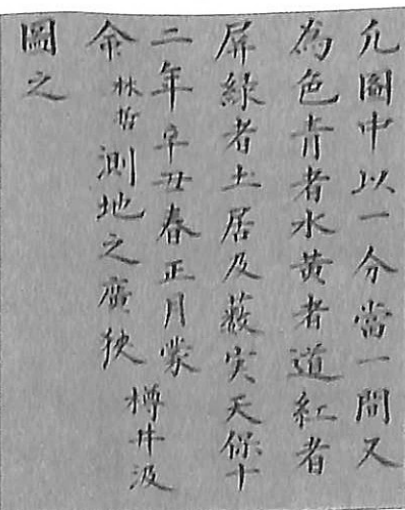
私はよそで生まれ育ったがこの町に何十年も住み、ほとんどの道は歩いたり自転車で通ったりしているが、本町や西町、中央商店街など以外は大体あの辺りと思っていた。街中の自治会には普通の農村部の集落のような、川の向こう・山の出っ張り（崎）よりこちら

とかいう明確な地形的境界がない。街歩きガイドの会合で旧町内の町の境界を尋ねてみたが、私の質問の仕方がよくないので要領を得なかった。住宅マップを見せてもらおうとあちこちに公民館の建物がある。「山崎ウォーキング&ウォッチング」というパンフレットは道筋がきちんと書かれ、街中の町名も青色で表示され、毎年更新されており参考になるが…などとモヤモヤしている時に、もみじ祭りで山崎歴史郷土館（図書館2階）の案内当番をすることになった。これが思わぬチャンスをもたらしてくれた。

◇◇江戸時代の山崎の絵図をみる

同年（平成二十七年）の十一月に五回ほどの受付当番をしたが、図書館の2階へ来るお客にまじって、展示物を何日もじっくりと見た。いつもだったら「ああわかった」で終わるところだが…。

A 館内西の壁に「天保山崎藩之図」という大きなきれいな絵図が掛けられている。よく見ると、町屋地域に上記の「出水町」や「北魚町」などの町名が道の部分に書かれている。ああここののか、ということは道の両側が〇〇町ではないか、と思いついた。しかし凡例の末尾に、樽井汲らが作成した天保十二年（一八四一）の絵図を後年に写したものとある。

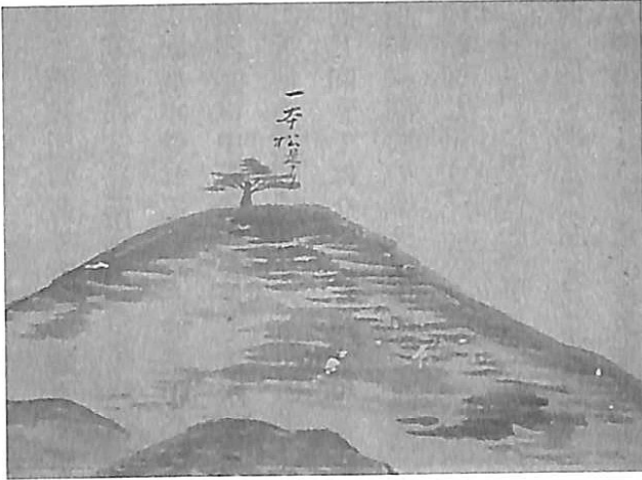
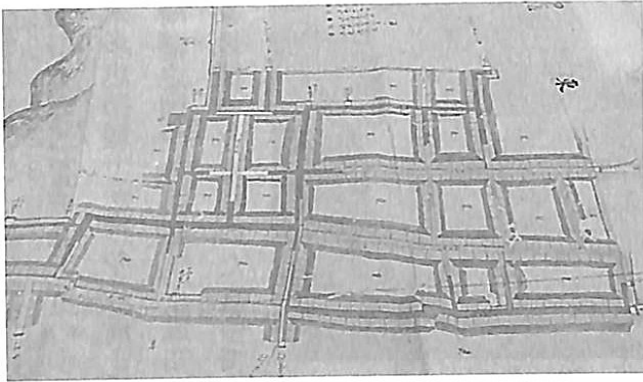


天保十二年絵図の凡例

B この掛け地図の下に、町屋地域のみを描いた天保十三年八月作成の地味な絵図が置かれている。凡例によれば、門前村の茂登馬・辰巳屋伝四郎・紙屋弥右衛門の三名が作成に係わったとある。道の両側には家々が描かれ、家並みに囲まれた中ほどは「裏」と書かれている。町名は道の部分に書き込まれ、やはり道の両側が同じ町名（両側町）であろう。市街地に描かれていない北部は後々家が建ち並び新たに町名が付けられたのかと想像する。

この絵図の凡例には、後世の写しとも書かれていないし、方位を示す「東西南北」の字は四方に向かって書かれているので、天保十三年の町人作成絵図は当時のものではないだろうか。

八幡神社や弁天池の北方の山頂には大きな松の木が描かれ、「一本松 是ナリ」と書き添えられている。となれば、天保の頃から山

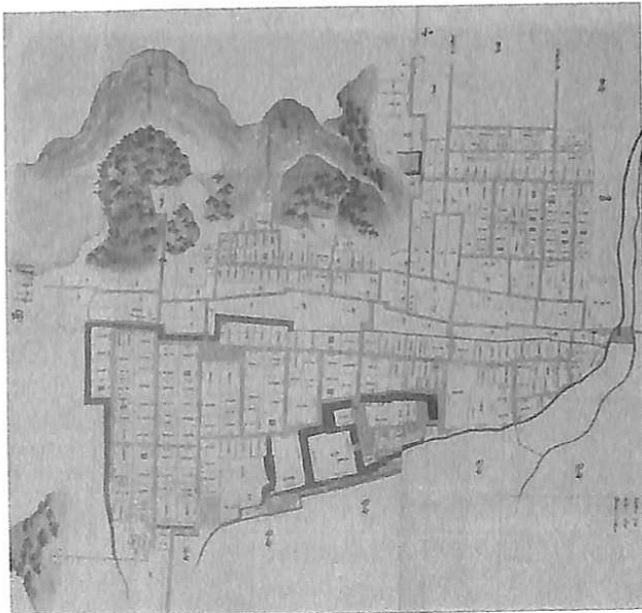


上の篠の丸城址は「一本松」と呼ばれていたのだと思う。さてこの町人作成の絵図によれば当時の町は次の通り十一あったが、この絵図のすごい点は、町域を示すために道が十一種の色で塗り分けられていることである（絵図出所の表示はないが）。

山田町・本町・西新町・門前町（門前村とは別）・北魚町・福原町・寺町・紺屋町・伊沢町・出水町・富士野町

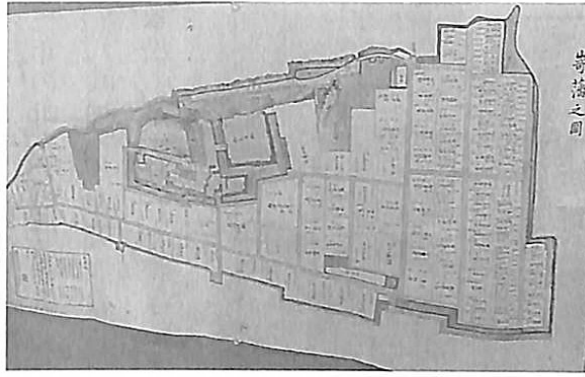
C 郷土館2階に上がってすぐの壁に、輝澄の次の領主松井（松平）康映時代の「宍粟山崎之絵図」（岡山大学：複写）が掛けられているが、町名は書いていない。山崎町史三一〇頁の「延宝年間の山崎城下町絵図」と、観光協会の冊子『街並探訪』の見開きの「宍粟山崎構之絵図」（岡山大

学）は同じものだが、町の名と北に伸びる道が書かれている。康映時代の絵図と同じく武家地域と町屋地域及び北の山を含んでいる。妙勝寺が移転する延宝九年より前の絵図である（本多氏入封は延宝七年）。



池田恒元及びその後継者の延宝年間の絵図

D 今年（平成28）の十月中旬に市役所ロビーで「山崎本多家と本多忠勝展」が行われた。そこに本多藩記念館所蔵の天保十二年「山崎藩之図」の複製（平成二七年）が展示されていた。城を中心武家地域のみを描いたもので方位の四字は中心に向かって書かれている（近世の絵図では東西南北の字はみな同じ向きではないそうだ）。これが『街並探訪』の「天保山崎藩之図」の元の絵図と思う。



六月頃に横井元理事長にお会いした時、図書館2階の大きな掛け絵図（樽井ら作の写し）の元は本多藩記念館にあると教えていただいたのはこのことであろう。また先日は『山崎町史』付図として、八幡神社地誌帳を元に作成した「文化十四年（一八一七）の町屋配置図」があると教えてもらった。

山崎の絵図は、まず松井康映時代、次に池田恒元と後継者の時代の、武家・町屋含めた絵図があり、天保十二・十三年に、武家地域・町屋地域別々の絵図ができたと推測する。

◇◇ ほかの史料から
旧町内の○○町がどこかは私なりに解決し、孫もあちこち行くうちにわかったみたいだ。でも史料的な裏付けは何かあるのだろうか…、と混乱の中に足を踏み入れた。

(一) 国元覚帳から

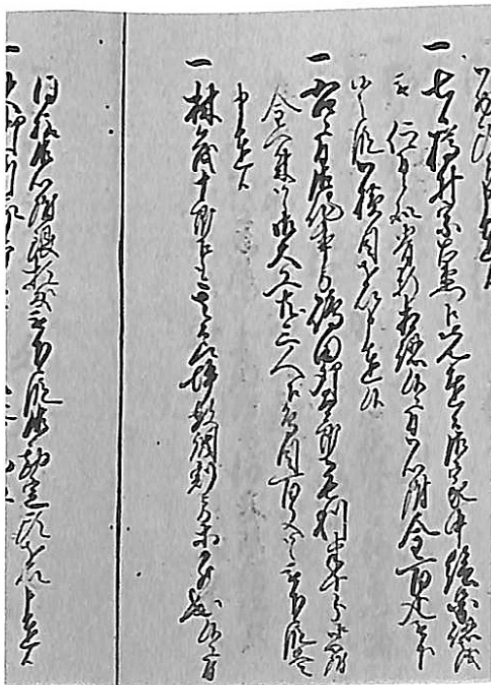
本多藩記念館には、天明元年（一七八一）から幕末までの山崎藩の『国元覚帳』・『江戸日記』・『大坂日記』が保存されており、幸い『国元覚帳』はそのコピーが宍粟市立図書館に寄贈されている。それを借りて関係する記述をさがした。

天保十二年（一八四一）五月七日の条に、

「樽井宗右衛門へ先達而御家中絵図認候儀被仰付候処 骨折相認候二付 御心附金百疋被下候之段 御横目を以申達候」

とあり、これは絵図作成に対する褒賞のことであろう。続いて、作事方の嶋田卯太郎と毛利半十郎に金一朱、協力した大工三人にも鳥目百文（銭）が、最後に、林茂十郎へも「坪数調割方」などに尽力したことに対し、銀拾匁が与えられている（四種のお金！）。

この樽井宗右衛門と林茂十郎は、凡例にある樽井汲と林哲なのではないかと思う。江戸時代の人は複数の名前を使ったので同一人物ではないだろうか。郷土館2階の天保絵図から少し離れた壁に、博



覚帳…絵図作成者の褒賞

学多芸の藩士樽井九右衛門（守城）の風流な掛け軸が展示されている。天保絵図の樽井宗右衛門（おそらく汲）は樽井九右衛門（守城）の祖父にあたるそうだ（本多藩記念館『参考御系傳』平成二五年複製版の解説より）。私は幕末に山崎藩の京都藩邸で働いた樽井八九郎は彼らの子孫ではないかと思っっている。

また、同じく天保十二年（一八四一）七月十九日の条に、

財政厳しき折に、「御用向をも繁多 猶其町之取治方宜敷格別骨折 出精奇特」につき、町方役人を勤めている間は「地子」（土地税）を免除する、と九人の町人の名が記されている。その中に、前記の町屋地域絵図の作成に係わった紙屋弥右衛門と辰巳屋伝四郎の名前がある。覚帳では町方絵図作成の記述を見つけ出すことはできなかった。私の読みとる力の不足から見落としたかもしれないが、この両人が当時居たことは確かである。

（二） 町方の文書から

まずは宝永五年（一七〇八）の片岡醇徳が著した『宍粟郡誌』は、「山崎拾町」として、

〔山田町・本町・北魚町・富士野町・紺屋町・寺町（大雲寺町）・

茶町（籠町）・西新町（佐用郡加増↓佐用町の名）・門前町・

福原町（高野町↓輝澄家来の福原氏の名）〕をあげている。

『山崎町史』二七八頁もほぼ同じである。茶町は後に伊沢町の一部になると書かれ、富士野町は富士野鉾山に通じる道筋からその名が付けられたらしい。

山崎の図書館の郷土史コーナーに、貞享三年（一六八六）と元禄

十二年（一六九九）作成の『惣町中地詰帳』（粟屋文書）のコピー

が置かれている。各町の家々が、表口何間・広さ何畝何歩・何々屋何兵衛と書かれている租税台帳だ（屋号には例えば五十波屋・宇原屋など郡内外の地名が登場し、人と物の集散地だったことを示す。

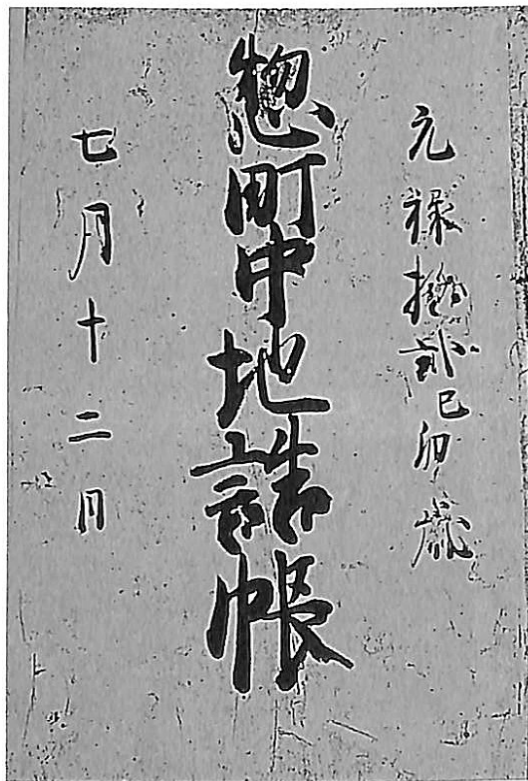
また屋敷が売買され所有者が替わったことも記されている）。これには、たとえば北魚町の家屋敷は「北側」と「南側」に分けて書かれており、通りをはさむ両側がひとつの町であったことがわかる。

これで疑問は解決したのだが、つい町の名を拾い上げてしまった…。

〔山田町・本町・東新町・西新町・門前町・福原町・富士野町・

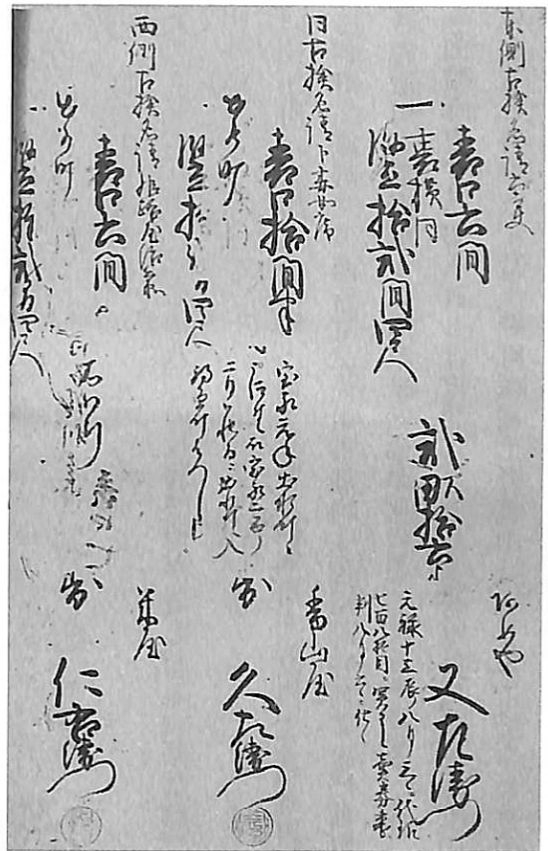
北魚町・紺屋町・茶町・寺町・富士野町新屋敷〕

福原町は三つにわかれ、また茶町・片原町はあるが、出水町・伊沢



元禄地詰帳の表紙

町はない。だが元禄の地詰帳の福原町分をよく見ると、一部が宝永元年（一七〇四）に出水町と改名を仰せ付けられたようで、貼り紙



福原町の一部…中ほどに出水町と改名の
貼り紙が見える

には宝永二年の帳面からは福原町からはずしたと書かれている（この年の大火の後に再編したともいわれる…『町史』）。

その数年後に片岡醇徳が書いた『宍粟郡誌』の山崎拾町に出水町の名が出てこないのは、変更後間もないからか彼が高齢で病気がちだったからか。この『宍粟郡誌』を宝暦三年（一七五三）に橋本元弥が紹介して山崎の町名十一箇町を追加しているが、その中に出水町が記載されているものの新たに「袋町」が書かれている（『播陽万宝知恵袋 下巻』八木哲治校訂・図書館にあり）。

妹尾氏旧蔵の町方記録『山崎藩年譜』は、延宝七年（一六八九）～明和五年（一七六八）の間の町方・郷方の主な出来事を項目程度に書き並べたものであるが、伊沢町の名が出てくるのは正徳六年（一七一六）以後である。伊沢町については両地詰帳に書かれていないが、天保の絵図が出来る前にはその町名が使われ、やがてその後には鴻ノ町・旭町・大歳町などの町名もできたのではないかと推測する。

これらのことについては、すでに何かにきちんと書かれているの
だろうし、地元ではそのいきさつが語り継がれているのだろうと思
う。

◇◇ おわりに

この町のことをよく知っている地元の人に初めから聞けばすぐ解
決することだった。なんとか自分で調べようとしたため長くかかっ
たが、その間にあれこれ考えることができた。私にとってはこれも
頭の老化防止に少しは役立ったかと思う。私は他所から来た者だし、
このことはこれでおしまい。

この度は久し振りに江戸時代の山崎藩『国元覚帳』（コピー）を
借りて読ませてもらった。この『国元覚帳』には行政を担った武家
の動静（藩主のこと・勤務・藩士の冠婚葬祭など）の記事が多いが、
当時の藩政にふれることができる。また所々に、「何町の何屋何右
衛門が」とか「何々村でこういう事があり」という記述もある。「事
件」にならない普通の当たり前のことは記録されにくいですが、これら
の記述を通して当時の生活の一端をうかがい知ることができる。い
つかそのような事を少しずつ調べてみたいと思う。

NHK大河ドラマ

「真田丸」の現地を訪れて

研修部

平成二十八年九月十八日の午前八時から山崎郷土研究会の研修旅行で和歌山県の九度山町など大河ドラマの地を訪れた。

真田信繁（幸村）は関ヶ原の戦いで東軍（徳川家康）が勝ち、上田城で徳川秀忠と戦いをしたために、高野山の麓九度山町へ家族とともに蟄居されたところで、行くところはいずれも有名などころであり楽しみにしていた。大坂城の砦真田丸と伝えられている所も見た。当時の歴史を考える上で重要な地である。和歌山県伊那郡九度山町の高野山の山麓の町で、真田幸村が不屈の心で再起を誓った地である。慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の戦いで敗れて父信幸とともに蟄居を命じられた。その後、妻子との生活が許され、庵を高野山の麓につくり、九度山で十四年間家族や家臣と過ごす。生活は苦しく、兄の信之の援助を受けていた。父の死後、慶長十九年（一六一四）に大坂冬の陣・夏の陣を戦うことになる。

九度山町に午前十一時四十分に着いて、真田宝物資料館（真田ミュージアム）で九度山での生活やゆかりの資料や古文書、真田紐をみる。続いて真田庵（高野山真言宗の寺院）は真田氏の六文銭（三途の川を渡る渡舟料）や信幸の墓がある。つぎに古墳（真田の抜け穴）をみる。幸村が大坂城へ馳せ参じたところとされる。この抜け穴を通っていった伝説が残っている。古墳時代後期の横穴式石室、

六世紀後半で、現状は石室も空いて玄室との境に弦門があった。大阪では、三光神社と安居神社を見学する。三光神社は、天王寺区玉造の大坂城と真田丸まで地下道でつながっていると伝わる。幸村の銅像がある。安居神社は天王寺区茶臼山の逢坂で、大坂夏の陣で幸村が戦死したところと伝えられる。一本松の下で無念の最期をとげたところに石碑と坐像がある。九月十八日の大河ドラマ「真田丸」では、「助命嘆願信之」で、九度山町が紹介されていた。

（文責 片山昭悟）



真田ミュージアム前



三光神社（真田丸伝説地）

宍粟市の梵鐘

(明治・大正・昭和・平成) 年代順集成 (Ⅲ)

片山昭悟

一、明治時代の喚鐘

- 1 山崎町与位 本因山善性寺(法華宗陣門流)の喚鐘(現存)
明治廿六年(一八九三)十一月吉日
- 2 山崎町野々上 永尾山陸雲寺(浄土宗知恩院派)の喚鐘(現存)
明治三十四年(一九〇一)三月
- 3 山崎町山崎 永昌山泉龍寺(浄土宗西山禅林派)の喚鐘(現存)
明治四十三年(一九一〇)五月吉祥
- 4 山崎町岸田 法流山明寶寺(浄土真宗本願寺派)の喚鐘(現存)
明治時代(宇野正碓先生の御教示による)

二、明治時代の供出された梵鐘

- 1 山崎町山崎 静明山青蓮寺(法華宗陣門流)の梵鐘
明治十年(一八七七)酉(とり)之孟冬
鋳物師 姫路 尾上久三郎
職工 渡辺元治郎・尾上宇七・渡辺安治郎
『山崎町史』によると、享保十六年(一七三二)初鋳
現存する喚鐘は宝永二(一七〇五)次乙酉(きのととり)季春
山崎町上寺 法光山妙勝寺(日蓮宗)の梵鐘
明治十二年(一八九七)四月一日
冶工 大阪高津住 今村久兵衛作
現在の梵鐘は昭和五十五年(一九八〇)七月の鐘
- 3 山崎町山崎 遊鶴山明源寺(浄土真宗本願寺派)の梵鐘

明治十二年(一八七九)卯(う)三月十一日 造之

職工 姫路野里 保城忠平

現存する喚鐘は、享保六(一七二二)丑(うし)曆 正月廿八日

4 山崎町上寺 泰安山興国寺(臨濟宗妙心寺派)の梵鐘

維時明治二十年(一八八七)竜舎戊亥(つちのえい)五月再刻

旧梵鐘は正徳二年(一七二二)九月 洛陽三条釜座和田信濃

現在の梵鐘は、京都太秦 岩澤の梵鐘

5 山崎町上寺 天龍山恩澤寺(臨濟宗妙心寺派)の梵鐘

明治廿二年(一八八九)五月中浣

6 山崎町山崎 功德山光泉寺(浄土真宗本願寺派)の梵鐘

明治三十二年(一八九九)一月十日鑄之

姫路博勞町 彫刻人 福井梅吉

7 山崎町山崎 龍眼山隨陽寺(真宗大谷派)の梵鐘

干時明治四十二年(一九〇九)四月廿五日鑄造之

鑄造人 龍野町 中村仁藏

大阪高津住 今村久兵衛藤原清久

江戸時代の供出された梵鐘

8 山崎町上寺 青龍山大雲寺(浄土宗)の梵鐘

享保五(一七二〇)歳次庚子(かのえね)春三月吉祥日

冶工播州姫路京口小野太郎左衛門尉藤原正家(鐘楼のみ現存)

現存する喚鐘は、明和八(一七七二)卯(う)天三月

なお、明治時代の供出された梵鐘については、故安井俊二氏の梵鐘調査によるものです。

三、長谷川氏の供出された明治時代の梵鐘

- 1 岡山県勝田郡勝間田町(現美作市) 正行寺の梵鐘
明治十二(一八七九)己卯(つちのとう)五月十三日

播州宍粟郡山崎住 鑄工 長谷川五郎兵衛

2 揖保郡新宮町（現たつの市新宮町） 心光寺の梵鐘

明治十三年（一八八〇）十一月於当村鑄造

鑄工 播磨国宍粟郡住 長谷川五郎兵衛

3 岡山県英田郡江見村（現美作市）川北 本教寺の梵鐘

明治四十三年（一九一〇）三月於当村内鑄造

鑄工 播磨国宍粟郡住 長谷川五郎兵衛

香川県の直島製錬所で坪井清足氏が梵鐘調査をされたもので、坪井良平

「徳川期における播・但両国の鑄物師―主として直島製錬所の資料による」『兵庫史学』第三十七号 昭和三十九年（一九六四）より

四、大正時代の喚鐘

1 山崎町元山崎 最上山経王堂（最上稲荷）の半鐘（現存）

大正四年（一九一五）七月

2 山崎町宇野 唯稱寺（浄土真宗本願寺派）の喚鐘

大正五年（一九一六）三月

3 山崎町塩田の菩提山明證寺（浄土真宗本願寺派）の喚鐘（現存）

大正十一年（一九二二）四月

享保二（一七一七）四月鑄造

寛政十二（一八〇〇）六月再鑄

明治十六（一八八三）十月再鑄

4 山崎町御名 城下小学校の時鐘（現存）

大正十二年（一九二三）二月

寄附者 井上かめ殿

5 山崎町元山崎 最上山経王堂（最上稲荷）の梵鐘

山崎小唄で知られる梵鐘は、

大正十三年（一九二四）甲子（きのえね）五月鑄造

大阪市高津住今村久兵衛で、昭和十八年（一九四三）

太平洋戦争で供出されている。

現存の梵鐘は、昭和二十五年（一九五〇）六月再建

京都三和梵鐘鑄造所 富山高勝之作

五、昭和時代の梵鐘・喚鐘

1 山崎町段 観音堂にある大師堂の喚鐘（現存）

昭和三年（一九二八）四月 山崎本町の小針氏寄進

2 山崎町野 虎伏山正福寺（浄土真宗本願寺派）の喚鐘（現存）

昭和六年（一九三一）五月

3 山崎町五十波 永亨山本源寺（真宗大谷派）の梵鐘（現存）

昭和廿三年（一九四八）四月八日

鐘樓は大正三年（一九一四）四月

喚鐘は、正徳四年（一七一四）十一月作（現存）

4 山崎町下比地 龍王山法光寺（浄土真宗本願寺派）の梵鐘（現存）

昭和二十三年（一九四八）四月

5 山崎町山崎 功德山光泉寺（浄土真宗本願寺派）の喚鐘（現存）

昭和二十三年（一九四八）戊子（つちのえね）五月一日

6 山崎町御名 撰州山西光寺（浄土真宗本願寺派）の梵鐘（現存）

昭和二十四年（一九四九）四月十五日 京都三和梵鐘鑄造所

7 山崎町田井 福城山本學寺（真宗大谷派）の梵鐘（現存）

昭和二十四年（一九四九）四月 内田交易株式会社

鑄匠七代目 次右衛門

喚鐘は、干時文政十一（一八二八）天十一月月上旬

完栗郡神野村田井 福城山什物 施主 自他同行

8 山崎町岸田 法流山明寶寺（浄土真宗本願寺派）の梵鐘（現存）

昭和廿四年（一九四九）仲春

9 山崎町野 虎伏山正福寺（浄土真宗本願寺派）の梵鐘（現存）

昭和二十四年（一九四九）五月丙（ひのえ）鑄

- 京都三和梵鐘鑄造所
- 10 山崎町与位 遍照山大勝寺（高野山真言宗）の梵鐘（現存）
昭和二十四年（一九四九）六月一日再鑄
鑄匠 七代目 次右衛門
- 11 山崎町須賀沢 無量山願壽寺（浄土真宗本願寺派）の梵鐘（現存）
昭和二十五年（一九五〇）四月再鑄
京都三和梵鐘鑄造所
- 12 山崎町須賀沢 無量山願壽寺（浄土真宗本願寺派）の喚鐘（現存）
昭和二十五年（一九五〇）四月再鑄
- 13 山崎町山崎 最上山経王堂（最上稲荷）の梵鐘（現存）
昭和二十五年（一九五〇）六月再建
京都三和梵鐘鑄造所 富山高勝之作
- 14 山崎町宇原 寶登山西願寺（浄土真宗本願寺派）の梵鐘（現存）
昭和二十五年（一九五〇）十月十日再鑄
京都七条若林佛具製作所
鑄匠 西澤吉太郎
- 15 山崎町宇原 慧日山法性寺（真宗大谷派）の梵鐘（現存）
昭和廿五年（一九五〇）十二月
鑄匠 七代目 次右衛門
富山県高岡鑄物師 老子製作所の作
- 16 山崎町木谷 法性山教專寺（浄土真宗本願寺派）の梵鐘（現存）
昭和二十六年（一九五一）三月十二日鑄
京都三和梵鐘鑄造所
- 17 山崎町山崎 功德山光泉寺（浄土真宗本願寺派）の梵鐘（現存）
昭和二十六年（一九五一）四月吉日再鑄
京都三和梵鐘鑄造所
- 18 山崎町塩田 菩提山明證寺（浄土真宗本願寺派）の梵鐘（現存）
昭和二十七年（一九五二）五月再鑄
- 京都三和梵鐘鑄造所
- 19 新梵鐘は、平成二十八年（二〇一六）十二月（口径二尺四寸（約七二・七二センチ）、重量二二〇貫（約四五〇キロ））
十月六日に京都市右京区 岩澤の梵鐘株式会社で鑄造火入れ式
十二月三十一日の除夜の鐘で初撞
鑄匠 京都 岩澤徹誠
- 20 山崎町山崎 遊鶴山明源寺（浄土真宗本願寺派）の梵鐘（現存）
昭和廿八年（一九五三）三月再鑄
京都 岩澤徹誠
- 21 山崎町中野 願立山極樂寺（浄土宗西山禅林派）の梵鐘（現存）
昭和三十一年（一九五六）季春
京都寺町 高橋鐘聲堂謹鑄
鐘銘から宝曆二年（一七五二）初鑄
昭和十七年（一九四二）十月供出
- 22 山崎町山崎 龍眼山随陽寺（真宗大谷派）の梵鐘（現存）
昭和三十一年（一九五六）五月
京都太秦 岩澤徹誠之作
鐘樓は明治四十二年（一九〇九）十月二十一日
山崎町段 観音堂の梵鐘（現存する）
昭和三十六年（一九六一）三月
- 23 山崎町野々上 永尾山陸雲寺（浄土宗知恩院派）の梵鐘（現存）
昭和三十九年（一九六四）四月吉日
鑄匠 京都 岩澤徹誠
- 24 山崎町御名 撰州山西光寺（浄土真宗本願寺派）の喚鐘（現存）
昭和四十六年（一九七二）十一月
鐘銘から正徳二年（一七二二）十一月初鑄
- 25 山崎町高下 龍川山法傳寺（日蓮宗）の梵鐘（現存）
昭和四十九年（一九七四）五月八日再鑄

内面の南下に「鑄匠京都岩澤徹誠」と陽鑄

26 山崎町上寺 天龍山恩澤寺（臨濟宗妙心寺派）の梵鐘（現存）

昭和四十九年（一九七四）

京都（太秦）岩澤の梵鐘

27 山崎町上寺 法光山妙勝寺（日蓮宗）の梵鐘（現存）

昭和五十五年（一九八〇）七月吉日

滋賀縣愛知郡湖東町（現東近江市）

鑄匠 黄地佐平謹鑄

28 山崎町山崎 静明山青蓮寺（法華宗陣門流）の梵鐘（現存）

平成十七年（二〇〇五）八月吉辰

滋賀縣東近江市長町

株式会社金壽堂（黄地佐平）

29 山崎町上寺 泰安山興国寺（臨濟宗妙心寺派）の梵鐘（現存）

平成二十六年（二〇一四）再鑄

京都（太秦）岩澤の梵鐘

私は梵鐘の魅力にひかれて金屋鑄物師長谷川氏を中心に江戸時代の梵鐘や喚鐘の現地調査をしました。

今回は山崎町内の明治・大正・昭和・平成の梵鐘や喚鐘を紹介させていただきます。明治時代の梵鐘の多くが太平洋戦争で供出されています。戦争で供出された梵鐘は、故安井俊二氏の梵鐘調査で貴重な資料を紹介させていただきます。

長谷川氏も香川県の直島製錬所で坪井清足氏が調査され記録から供出されていることがわかりました。

梵鐘調査は、現地を訪れて自分の目で見て、お話しを聞くことを心掛けました。

梵鐘は一つひとついわれのある梵鐘です。ひっそりと寺院に釣り下がっている梵鐘を訪れて、時を告げる鐘や除夜の鐘の音の響きを聞かれたら心に響き安らぐものと思います。

写真1



光泉寺の梵鐘
京都三和梵鐘鑄造所

写真2



妙勝寺の梵鐘
滋賀県 黄地佐平

写真3



法性寺の梵鐘
富山県 七代目 次右衛門

写真4



明證寺の梵鐘
京都 岩澤徹誠

会員・家族の文芸

◎冠 句

恩返し 父母が眠りし墓守る
 ふる里の 山川恋し友の顔
 恩返し 児らに伝える都多の良さ
 ふる里の 昔を偲ぶまち歩き
 恩返し 畑耕やして肥を撒く
 ふる里の ニュースに友がクマメール
 恩返し 感謝の気持ち忘れずに
 ふる里の 山河に帰る二人連れ
 恩返し 感謝の念に心こめ
 ふる里の 学び舎さびし子等の数
 恩返し 込める思いは掌(たなごころ)
 ふる里の 匂いよ届け宅急便
 恩返し 感謝を込めて仏前に
 ふる里の 山も色づき秋深し
 恩返し 元気なうちに来れること
 ふる里の 祭りばやしが風に乗る
 恩返し 墓地の整理を思い立つ
 ふる里の 川の流ればさらさらと

◎俳 句

五欲焼く如く枯菊焼きにけり
 銀杏散る菩薩の無垢も黄金なり

宇田 幸夫
 宇田 幸夫
 大谷 志路
 大谷 志路
 嶋津 千里
 嶋津 千里
 坂本 忠彦
 坂本 忠彦
 実友 勉
 実友 勉
 谷笹 まや
 谷笹 まや
 谷笹 まや
 為国真佐行
 為国真佐行
 三木ひづる
 三木ひづる
 中瀬 公三
 中瀬 公三
 中瀬 公三

京屋 伊助
 京屋 伊助
 京屋 伊助

老犬を促す少女猫やなぎ

白蝶のごとく少女の弾み来る

ふるさとに笑顔持ち寄る秋祭り

氣に入りのいつもの場所に小鳥来る

静かなる一日となりき白障子

奥つ城に線香たむけひめつばき

野分晴休耕田に野鳥群れ

酒蔵に人の出入りや秋の風

着膨れて売り女巧みや魚の店

老楽の師走顔して忙の閑

大家族たりし日もあり石露の花

望郷にひたるひととき蝉時雨

凧や幼な引き寄す母の胸

散り敷いて尚山茶花の咲き誇る

賑わいの去りて薄日のもみじ山

寄せ鍋や揃うまで待つ大家族

初春やきらめく瀬戸の波静か

祖父作の白馬に祈願初詣

母の椅子あれから二十年の冬

うたかたの里の日を恋ふ雪婆(ばんば)

霜白し山脈(やまなみ)かなた茜雲

春の風犬にひかれて田んぼ道

手を叩き鯉呼んでみる寒の明け

休耕の棚田に小さき野焼き立つ

里見 和樽

里見 和樽

杉山美保子

杉山美保子

高井 麗子

高井 麗子

田中 良子

田中 良子

田中 慶英

田中 慶英

鳥羽チエノ

鳥羽チエノ

三浦 ゆき

三浦 ゆき

高井 智代

高井 智代

西嶋 忠義

西嶋 忠義

速水美知代

速水美知代

矢野登次郎

矢野登次郎

宗平 圭司

宗平 圭司

事務局だより

平成二十九年 郷土研究会 総会のご案内

本会の総会を左記により開催いたしますので、会員の方々はお繰り合わせのうえ、是非ご参加下さるようご案内いたします。

記

日時 平成二十九年四月九日(日)午後二時より
場所 宍粟防災センター 四階 研修室
内容 事業報告、会計報告、役員改選、事業計画、予算審議その他アトラクション DVDの鑑賞(予定)

なお、このお知らせをもって、総会のご案内とさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

編集後記

『山崎郷土会報 第一二八号』をお届けします。いずれも執筆者の思いが伝わる労作で、丹念に文献や史料調査と現地調査をされて原稿を頂いたことに対し深く感謝申し上げます。

今後も、会員の皆様の興味や関心があるものを紹介し、読みやすいものにしたいと思っています。次号も原稿を募集しますのでよろしく願います。

『山崎郷土会報』に宍粟鉄や揖保川の高瀬舟について寄稿されていた恩師の故宇野正碓先生から「灯台下暗し」ということを聞いたことがあります。『広辞苑』によると、意味は灯台の直下は明かりが暗いように手近のことはかえってわかりにくいものとあります。

「遠くのことばかり見ることより自分のまわりのことや、地元の良いさが気が付くことです。」と私に言われたことがあります。

それから宍粟や山崎の地域をテーマすることになったきっかけになりました。それには、まず、地域の歴史をわかりやすく伝えることが最も大切であると私は思います。

「井の中の蛙」ということわざがありますので、これからは見識をひろめて郷土の調査と研究をすること。郷土の歴史を正しく伝えること。地域の伝承を伝えること。そして、次代に継いでいくことも大切です。

今年(と)は酉年です。皆様にとって鳥のように飛躍の年になるように祈念します。

(片山昭悟)

外科・内科

山中医院

院長 山中潤一

山崎町西町・TEL 020036

ほっと、ひといき

伊沢の里

- 各種宴会 祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
- 宿泊 観光、ビジネス 帰省
- 日帰り入浴 生薬風呂、露天風呂、サウナ
- レストラン 御膳、定食、麺類、井物

兵庫県宍粟市山崎町生谷214-1
TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362
URL:www.isawanosato.com E-mail:info@isawanosato.com

PHOTO-STUDIO
Meyama
P.C.S

スタジオウエヤマ

●山崎店 兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL (0790) 62-8027
FAX (0790) 62-8827

株式会社 安井書店

ブックランド店 山崎町中井
本店(文具部) 山崎町中井
TEL (64) 2051・FAX (64) 2052 TEL (62) 0700・FAX (62) 2117

<http://www.yasuisyoten.co.jp/>



パンフレット・デザイン広告
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌
ポスター・案内状・シール等

(有) 稲田印刷

〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL (0790) 62-0254 FAX (0790) 62-4764

まごころを伝えます。

一献献上 品質本位 地酒

山陽 盃

確かな品質と味わい。

SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

TEL.0790(62)1010 FAX0790(62)6218
E-mail info@sanyouhai.com HP <http://www.sanyouhai.com>

いとう画廊

兵庫県宍粟市山崎町山崎413
TEL (0790) 62-0371
FAX (0790) 62-0371

創業明治28年・さつき本舗

四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を

御菓子司 さつき

本店：播州山崎町山田 (電) 62-0160